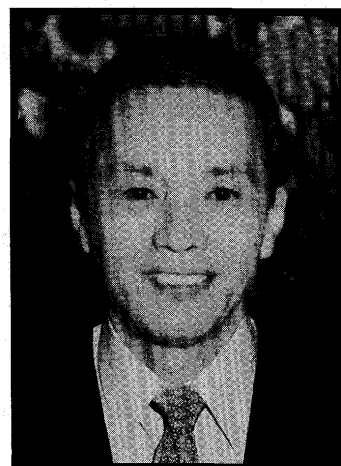


ニュース

半澤秀郎博士のご逝去を悼む



東亜建設工業株式会社顧問の半澤秀郎博士は、さる2002年6月12日、脳腫瘍により逝去されました。享年62歳の早すぎる旅立ちでした。ここに謹んで哀悼の意をささげ、ご遺族の皆様にご心より弔慰の意を表します。

半澤博士は1969年に東亜建設工業株式会社に入社以来、現在の同技術研究所の前身である土質研究室の創設に始まって、軟弱地盤における建設技術を中心に研究開発を進め、30余年にわたって一貫して現場の技術課題の解決に献身されてきました。さらに、卓越した地盤技術者であるにとどまらず、実務に役立つ技術に関して“*Soils and Foundations*”や国際会議に多くの学術論文を発表する研究者でもありました。東京湾の人工島建設ではサンドサンプラーを開発し、埋立砂の力学特性の評価と施工管理に関して活発に論文を発表して、大きな注目を集めました。アラビア湾の港湾建設プロジェクトでは、自然堆積粘土の強度に関する考究によって、半澤博士独自の強度決定方法「修正ベールム法」を確立し、この一連の論文は世界的な反響を呼び、その成果は最近出版された地盤工学の教科書で詳しく紹介され、海外の文献にも多数引用されるなど、大きく評価されています。半澤博士の業績に対して、1982年には東京大学から「工学博士」の学位を授与され、翌1983年には地盤工学会から「年代効果を受けた粘土の強度決定と安定問題への適用」に関する研究で、「論文賞」を受賞されています。このほか、国際会議でのウィットに富んだ発表や海外での講演で国際的に活躍され、海外に多くの知己をお持ちであり、地盤工学の分野において国際的に最もよく知られた日本人の一人でした。

1986年からは技術研究所長に就かれましたが、1995年から1999年の取締役在任中も含めて、半澤博士は常に行動的な地盤工学者でした。国内外の港湾、空港建設工事など多くの現場を技術面で支える一方、後進への熱く厳しい指導を行い、いわゆる「半澤門下生」を社内外に数多く育成されました。日本の軟弱地盤研究の中心として現在活躍されている研究者の方々には、半澤博士の影響を受けた方が少なくない伺っています。

地盤工学会の活動でも、半澤博士は、国際地盤工学会（ISSMFE）に1994年に発足した「沿岸域における地盤工学をテーマとする第30技術委員会（TC30）」でその中心的なメンバーとして活躍し、1999年度には「世界の地域土質（Local soil）の比較検討に関する調査委員会」の委員長を勤めました。2000年のIS-Yokohamaでは、病をおして「軟弱地盤への一面せん断試験とコーン貫入試験の適用」の題で基調講演をされ、大きな感動を呼び起こしました。

半澤博士の「生き様」を知っていただくため、幾つかのエピソードをご紹介します。①1980年代、灼熱のイラクの現場に学生運動家のような風体でふらりと現れ、そして技術上の難問題を見事に解決しましたが、ロンドンの入管では過激派と疑われてしまいました。②昼休みやアフター5の花札では、その奇声がビル内に響き渡りました。③お嬢さんのジャージを着て自らボーリングマシンを操り、ときに泥水を頭からかぶり、そのまま道端で握り飯をほうばっておられました。ボーリング中のミスには容赦ない罵声と時にはパイプレンチまで飛んできました。④安易な過大設計には「豚小屋に杭基礎!」と怒鳴り飛ばしました。⑤「海外の交渉では“言い負かすか、負かされるかの勝負”で『悪知恵』の限りを尽くす」と言って憚らない仕事ぶりとその真摯な姿勢は忘れられません。

こうしたご活躍や国際レベルの学術業績を半澤博士が挙げる上で、ご家族が大きな力となっていました。この数年間は闘病生活を続け、しかも最後まで仕事を続けることができましたのは、ご家族からの愛情とご自身の技術に対する探究心による賜物でした。1973年、心酔していたNGIのBjerrum博士の死に際し悲嘆にくれていた半澤博士は、奥様から「あなたもBjerrum博士のように、死んだ時に外国の若い方々が涙を流してくれるような、それほどの人になりなさい」と励まされたそうです。現在、奥様のお手元には、半澤博士の訃報に接して涙を流された海外の若い研究者や技術者から、弔電が届けられています。半澤博士の研究成果と「生き様」は、我が国に留まらず世界の地盤工学者にとって大切な遺産です。謹んでご冥福をお祈りいたします。

（東亜建設工業株式会社 技術研究所長 岸田隆夫）

社団法人 地盤工学会